

## ノーマディック・ユニヴェルシタス

場と体験の連鎖による大学空間の構築

Nomadic Universitas

Construction of University Space Through a Chain of Places and Experiences

11923003

岩城 絢央

主査 篠原 聡子

教授

副査 江尻 憲泰

教授

片山 伸也

准教授

ユニバーシティ[University]の語源であるユニヴェルシタス[Universitas]は「教師と生徒の集団」を意味し、原初の大学は「生徒の集団と活動」として存在した。ユニヴェルシタスが大学の活動を行う場所に大学空間が発生し、彼らの行動が空間を規定した。大学が固有の不動産を所有するまでに2世紀を要していることから、「ユニヴェルシタス」が大学空間の最も主要な実体的部分であることがわかる。しかし、日本の大学は“人”よりもそれを囲う“建築”が前景化し、静的な風景の断片として存在する。大学空間の在り方を、その本質である起源に遡って思考し、個やその集合体という視点から今日的に再構築を試みる。

「ユニヴェルシタス」が自発的に移動することで、分散する敷地をメッシュワーク的に繋いでいき、全体が生まれるような大学を構想する。個々人の活動が大学と都市を区別しない空間的連続性の中で行われ、そこに立ち現れる発生的な「場」が連鎖していく。建物の集中という大学の近代化に抗い、効率性や経済性には変えられない体験の価値を大学に見出すことを目指す。

**Keywords:** Universitas, University area, Nomadic community, Distributed arrangement, Continuum of places, Blurring architecture

ユニヴェルシタス, 大学街, 移動する共同体, 分散配置, 場の連続体, 境界が溶ける建築

## 1. 序章

## 1-1. 研究背景

## 1-1-1. 大学の原点 —ユニヴェルシタス—

今日世界中に拡大している大学制度「ユニバーシティ[University]」は、13世紀のヨーロッパにおいて神学や法学の専門教育を主業とする教師と、彼らのもとに集まった学生たちが結成した同職組合「ユニヴェルシタス[Universitas]」に由来する。「ユニヴェルシタス[Universitas]」という語が示すように、大学は「教師と生徒の集団」から始まり、原初の大学は「活動」として存在した。はじめに教師と学生ありきという具合であり、ユニヴェルシタスがある場所に定着した時、そこに大学空間が発生した。空間が行動を規定することもあれば、行動が空間を規定することもあるが、大学空間は後者の好例である。実際に大学が建物を伴って現れてくるまでに2世紀という長い歳月を経ていることから、知的好奇心の赴くままに教師と生徒が集まり集団化したものが大学の本質であり、大学空間の原点と言える。共同体とその活動の集積から建築が立ち上がった点で、大学空間は興味深いものであり、その歴史は大学空間を再考する糸口を与えてくれる。

## 1-1-2. 静的な風景の断片としての日本の「キャンパス」

大学の歴史からは、ユニヴェルシタスとその活動を軸に展開される動的なイメージが見えてくる一方で、日本の大学は「閉鎖的シンボル」としての意味合いが強い。“人”よりもそれを囲う“建築”が前景化し、活動がある枠の中に閉じ込められた静的なイメージとして存在する。孤立した実験室や研究室の集積と化し、人とその活動が見えなくなってしまっている日本の大学に疑問を抱いた。原初の大学や海外の大学の事例から大学空間の在り方を模索し、閉鎖的シンボルである日本の「キャンパス」を今一度見直す必要があるのではないだろうか。

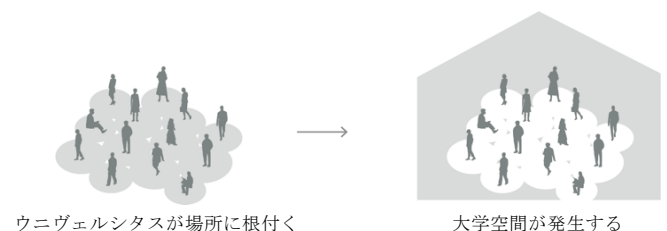


図1：行動が空間を規定する

## 1-2. 研究目的

### 1-2-1. 人から建築へ

原初の大学は「教師や学生の集団」であり、ウニヴェルシタスが一時的、または恒久的にある場所に根付く時、そこに大学空間が発生した。歴史を紐解くことで、大学の中に”人間性を原理として展開され得る空間”の可能性を見出すことができるように思われる。自立した個の集団に焦点を当てることは新たな大学への萌芽となるだろう。”建築”よりも”人とその活動”が前面に現れてくる大学空間の在り方を思考する。日本の大学空間に人間性を回復し、「共同体とその活動」から立ち現れる建築の可能性を追求することを目的とする。

### 1-2-2. 建築から都市へ

大学空間はひとまとまりの共同体をモデルとして作られた都市の縮図とも言える。大学キャンパスで起きている課題は都市やまちづくりの現場でも同様に起きており、キャンパスデザインは大学という枠を超えて都市にも応用可能であり、アーバンデザインは大学にも援用することができる。大学空間を研究することでその意味を都市にまで拡張することを目指す。

### 1-2-3. 人から都市まで

大学空間を媒介に人から都市までを考えることを試みる。人から都市までという大きな飛躍があるように思われるが、大学空間はそれらの時空を行き来することのできる題材と言え。人やそのふるまいというミクロな視点と都市というマクロな視点を横断しながら空間をデザインすることを目的とする。

### 1-2-4. 大学空間を再考する

情報伝達のネットワークが発達し、必要な地点で必要な時に情報を受け取れる現代において、施設の集中が情報の集中を意味することもなくなっており、施設は一箇所に集まる必要がなくなった。あるいは固定した場所を必ずしも必要としない。また、大学は学ぶ場所の十分条件であり、かつては学びのサードプレイスであった街は今ではファーストプレイスにもセカンドプレイスにもなり得る。こうした時代において、キャンパスの存在理由を再認識することや大学と街の関係を考え直すことが必要である。情報伝達には乗り得ない、人と人との直接的な出会いや対話を生む場としてのキャンパスの意義や、大学の知的活動が街に波及していく大学の在り方を思考する時がきている。

これからの大学空間の在り方を、その本質である起源に遡って思考し、「共同体」・「活動」・「空間」という視点から今日的に再定義することを目的とする。

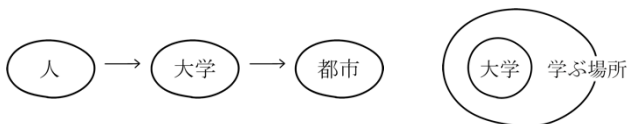


図2：人・大学・都市という時空を行き来する

図3：大学と学ぶ場所

## 1-3. 研究構成

序章で本稿の背景と目的を明らかにした上で、第2章では研究対象である大学空間について主に文献研究から整理し、事例とともにその特徴を明らかにする。第3章では文献研究から得られた知見をもとに、目指すべき大学の方向性を提示する。第4章・第5章では

敷地に当てはめて設計提案を行い、構想を実際の空間として建築化していく。

## 2. 研究対象

### 2-1. 大学空間の型

『知の空間』(岩城和也著)ではウニヴェルシタスの出現によって形成された大学空間をその歴史上、大きく3つに分類している。

#### 2-1-1. 「場／部屋」としての大学

「場・部屋」としての大学はヨーロッパ中世における大学の発生と同時に姿を現した。著名な教師の名声に惹きつけられた学生はヨーロッパ各地から遠路はるばるパリやボローニャに集結し、都市の中の公共空間や家屋の中の部屋を利用して大学の活動を行っていた。

大学の発祥の地であるシテのノートルダム大聖堂の広場からプチ・ボンを渡るとそこにカルチェ・ラタンと呼ばれる一帯が存在する。「カルチェ・ラタン[Quartier Latin]」はパリの一帯の呼び名として一般的によく知られているが、直接的にはラテン地区を意味する。18世紀ごろまで大学の共通語はラテン語であり、学生や教師が多く集まりラテン語が行き交う境界が存在した。この「カルチェ・ラタン」が最初根源的な大学の形と言える。

#### 2-1-2. 「建物」としての大学

「建物」としての大学は14世紀から15世紀にヨーロッパで発生した。大学の発生から2世紀の間、都市から都市へ軽快に移動する集団であった大学は固有の不動産を所有しなかった。やがて大学が社会的に認知され制度化されるようになると、大学は教場や学寮、図書館といった固有の不動産を所有するようになり「建物」としての大学の時代に突入する。その発生の仕方は大学本館型と全課学寮型に分けられる。前者は都市に分散していた教場が一箇所に集約されて大学の本館が建設され、ボローニャ大学をはじめとする南欧系大学に見られる。後者は都市に分散していた下宿が一箇所にまとめられて学寮(カレッジ)が建設され、パリやオックスフォード、ケンブリッジなどの北欧系大学に見られる。学寮は次第に教育の場としても活用されるようになり、大学の全教育課程を含む学寮は特に全課学寮と呼ばれた。学寮制の発達によって大学は大きく変容し、空間的にも安定したものとなった。

#### 2-1-3. 「領域」としての大学

「領域」としての大学は19世紀後半から20世紀初頭にアメリカで発生した「キャンパス」を指す。私たちが慣れ親しんでいる大学の形であり、現代の大学の代名詞にもなっている。それまで都市の中に点在する形でしか建物を持たなかった大学が、広大な敷地を所有し、建物全てを含む自律的な空間として存在するようになる。

表1：大学の3つの型

|      | 「場・部屋」としての大学 / 12C   | 「建物」としての大学 / 14C  | 「領域」としての大学 / 19C  |
|------|--|---|---|
| 形態   |  |  |  |
| 活動場所 | 公共空間(広場・橋)・教師の家  | 学寮(カレッジ)  | キャンパス   |
| 大学の例 | ボローニャ大学・パリ大学   | オックスブリッジ  | アメリカの大学・日本の大学   |

出典：(左) [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Laurentius\\_de\\_Voltolina\\_001.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Laurentius_de_Voltolina_001.jpg)  
(中) <https://storage.googleapis.com/tra-wp/2020/01/9efeca54-ccfs.jpg>  
(右) <https://i.pinimg.com/originals/26/d6/90/26d690623534ef6861d7eac1384536b.jpg>

#### 2-1-4. 多様化する大学空間の型

以上のように「場・部屋」、「建物」、「領域」と次第に大学空間が大規模化し固定化し空間を占有していったことがわかる。その過程で、ユニヴェルシタスの活動も都市に浮遊するものから場所に固定されるのへ、大学は都市に依存するものから自立したものへと移り変わっていった。

ここで特筆すべきは、私たちのよく知る「キャンパス」という形式は800年の大学の歴史の中の100年に過ぎないということである。「キャンパス」という形式が出現するまでに約700年という時間を要していることから、「場・部屋」や「建物」としての大学の時代には、建物すべてが一つの敷地に収容された大学の姿は想像できなかっただろう。また、大学空間は新たな型を手に入れたことで古い型が消滅したわけではなく、800年という歴史の中で3つの型を手に入れたと言える。「建物」としての大学は依然としてその姿を変えず、街と渾然一体となって存在する。

#### 2-1-5. 大学空間の近代化

「場」や「建物」の大学として700年間続いてきた大学が「キャンパス」という形式を持つようになったのにはいくつかの理由がある。一つには、近代化によって大学空間が大規模化、複雑化、高密度化したことが挙げられる。閉領域を形成し、建物を一箇所に集約することが管理の観点やものの集合に機能的・視覚的な秩序を与える点において効果的であった。もう一つには、中世以来のカレッジ大学の停滞により、新たな大学像が求められたことに起因する。学問の自由や大学の自治という考えが大学を都市から隔絶する方向に働いた。また、近代の都市計画が都市活動の機能的分離を1つの目標としたことで、土地利用の効率化＝専有化が至上命令となり、キャンパスという形で空間が明確化した。

### 2-2. 大学町・大学都市

#### 2-2-1. 大学の移動と学都の拡散

「場」としての大学の時代、教師や学生は都市から都市へと軽快に移動した。それは学徒の集団である大学も同様であり、大学自体が都市から都市へと頻りに移動した。大学が移動する理由は「タウンとガウン」という言葉が示すように、地元住民と異邦人の集団である大学の対立によるものが大きかった。下宿の家賃や書籍の値段交渉、大学の裁判権といった都市との間で交わされる契約に関して度々対立関係に陥り、固有の不動産を持たなかった大学は容易に都市を退去した。

また、ヨーロッパには学問の中心が移動すると言う考え方（学府継承説）があり、学都の乱立と競合の現象が起きた。大学街の数は12世紀に6であったのが1600年には108にまでその数を増やし、学問の中心が急激に増えていったことがわかる。学徒がたびたび都市を移動し分化していくと、それによって次々と新たな大学都市が誕生し、細胞分裂のごとく拡散していった。

フランスのアンジェーはパリからの、イギリスのケンブリッジはオックスフォードからの、イタリアのヴィチエンツァ、パドヴァはボローニャからの移動によっていずれも13世紀に創立された大学である。14世紀にドイツ語圏または東欧や北欧に大学都市が生まれた時、大学は全欧的な姿をとるようになり、移動する大学の時代はプラハの大分裂を最後に終焉を迎えることになった。

#### 2-2-2. 大学都市の事例

学徒が集まり大学の活動を中心とした街区、または都市内に大学建築物群が点在している市街地は「大学街」または「大学都市」と呼ばれる。本研究では特に、大学の空間や活動が都市に溶け込み、大学と都市が渾然一体となって存在するものを指すこととする。大学都市の中には自然発生的に現れ、今でもその姿を変えずに街に織り込まれている大学がある一方、19世紀になってから大学空間の再考という意図のもと、計画的につくられた新設大学が存在する。それらの系譜を下図に示し、自然発生的な大学都市からはボローニャ大学とケンブリッジ大学、計画的に作られた新設の大学都市からはウルビノ大学とルーヴァン・ラ・ヌーヴ大学を選定し、それらの概要と特徴を整理する。

ウルビノ大学やルーヴァン・ラ・ヌーヴ大学の事例から、キャンパス・ユニバーシティの時代の中でも「建物」としての大学を取り戻そうという意識や実践があることがわかる。

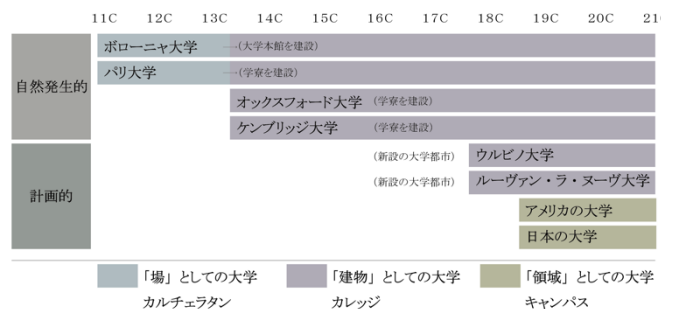


図4：大学の型と系譜

#### 2-2-3. 大学の公開性と全体性をもたらす建築言語

大学が都市と融合することに成功している要因や分散する大学に全体性を与えている建築言語を表にまとめる。ボローニャでは連続的な屋根空間である「ポルティチ[Portici]」が分散する敷地をつなぐ廊下となっており、ケンブリッジ大学ではクォードラングルという四角い中庭の形式が増殖・連鎖することで有機的な全体ができています。新設の大学都市では建築材料を統一させることで街との融合に成功している。また、全ての例において持続的な空間であるオープンスペースの果たす役割が大きい。大学は広場や都市のオープンスペースと接続して建てており、街全体が大学、もしくは大学自体が街と感じられる環境が形成されている。

表2：大学都市の特徴

| 大学   | ボローニャ   | ケンブリッジ                | ウルビノ  | ウルビノ                                   |
|------|---|-----------------------|---|--|
| 公開性  | ・分散する敷地<br>・広場や都市のオープンスペースに面する立地<br>・中庭型、または前庭型の形式を持つ建築 | ・中庭型の建築<br>(クォードラングル) | ・分散する敷地<br>・カフェなどの機能を街との接点に配置   | ・広場や都市のオープンスペースに面する立地<br>・中庭型の建築       |
| 全体性  | ボロネーアの連綿が大学の屋下の役割を成し分散する敷地をつなぐ                          | クォードラングルの増殖と連鎖        | 材料(マテリアル)の統一  | 材料(マテリアル)の統一                           |
| 理念   | 大学は学生の専用施設ではなく、一般市民が利用できる社会施設であり、共用空間の集合体である            | -                     | 大学は敷地を分散し、その活動を分散させ、市民にも容易に利用され、そこから志み出される文化がより解放的な方向に向かう開かれた構造を持つべきである | 「大学と都市の一体化」<br>キャンパスをつくるのではなく、都市をつくること |
| イメージ |   |                       |   |  |

出典：左から <https://visitloglogna.com/wp-content/uploads/2017/04/zamboni-2.jpg>  
<https://2-prod.cambridge-news.co.uk/incoming/article141337339.see/ALTERNATES/1200/Cambridge-University.jpg>  
<https://lib.gsu.edu/content/view/full/10119/1968/22> | 4450N40694674333737D19-YE83F587022866a8b1761874129  
 由良知久：「(カルパチスム)の契機を超えて」『SD 165』鹿島研究所出版会、1978年

## 2-3. 都市と大学、大学における居住空間の意味

### 2-3-1. 都市と大学

大学はノンフィジカルに知識や情報が交錯するだけでなく、フィジカルに人々が離散集合する。それゆえに、大学はコミュニケーションの一つのフォーカルポイントであり、都市のネットワークのなかに位置付けられる。キャンパスの成立によって自足的空間を指向することは都市と大学との相互依存関係が解消されることを意味するが、本来、大学と都市とは切り離せないものである。

### 2-3-2. 大学における居住空間の意味

海外においては生活空間が大学に含まれることが一般的であるが、日本においては馴染みがないことが多い。寮があってもキャンパスの端に追いやられ、生活空間に重きを置いている例は少ないように思われる。

こうした状況は日本の大学が創造の場ではなく、科学技術の輸入の場であったことに起因する。日本の大学は1810年にフンボルトの理念によって生まれたベルリン大学を模してつくられたとされている。そのため、ベルリン大学の空間的な特性や理念を引き継いでいるところが大きい。特に、ベルリン大学はキャンパス・ユニバーシティであり、研究施設のみで構成され、寮などの生活部分を持たなかったことを強調しておく。日本のほとんどの大学が「キャンパス」形式を取り、学生の大半が寮で生活し大学生活を送るということに馴染みがないのは、ベルリン大学を手本としたことが影響していると考えられる。研究施設などの生産的部分が大部分を占めることで、寮などの居住部分が軽視されており、それが”人”よりも”建築”が前景化する「キャンパス」を作り出している。

大学空間において居住部分が重要性を増すことは、動的な生活のイメージとしての大学が形成されることを意味する。学ぶことが生活の一部となり、街に対して帰属意識を持つようになり、大学が都市のネットワークに属することにも繋がるのではないだろうか。

### 2-3-3. アカデミックな部分と居住部分の配置パターン

一般的に海外の大学ではアカデミックな利用、寮やその他の生活空間、スポーツフィールドやオープンスペースのそれぞれが敷地の3分の1ずつを占める。ここでは海外の大学の事例から、アカデミック空間と居住空間の配置のパターンを整理する。

まず、アカデミック部分と居住部分にヒエラルキーがあり、両者をゾーニングしているもの(1)と、アカデミック部分と居住部分を混在させ、ユニットを作っているもの(2)とに大別できる。

両者をゾーニングしているものにはカルフォルニア大学アーヴィン校が挙げられる。中心にアカデミックな機能、周縁に居住空間を配置している。日本の大学はカルフォルニア大学アーヴィン校などと居住部分の占める割合に大きな差があるが、このパターンに含まれる。また、ラフボロー大学のように学生の存在と彼らの活動こそが大学の主要な実体的部分であると認め、生活空間を中心に据え、その比重を大きくとる大学も存在する。両者をゾーニングし、居住部分の比重を大きく取っている大学の中で、特にカレッジ(学寮)を中心に展開するものは特徴的である。イギリスのカレッジ・ユニバーシティに見られるこのパターンは、周辺に学部の建物があるがカレッジ群で大学が形成されていると言える。

一方、両者を混在させているものの中にはカレッジと学部とをセミラティス状に配置しているものと、カレッジと学部とをセットに

してユニットをつくっているものと分類できる。どちらも単位を形成しているという点で、施設の増減が可能な形となっている。

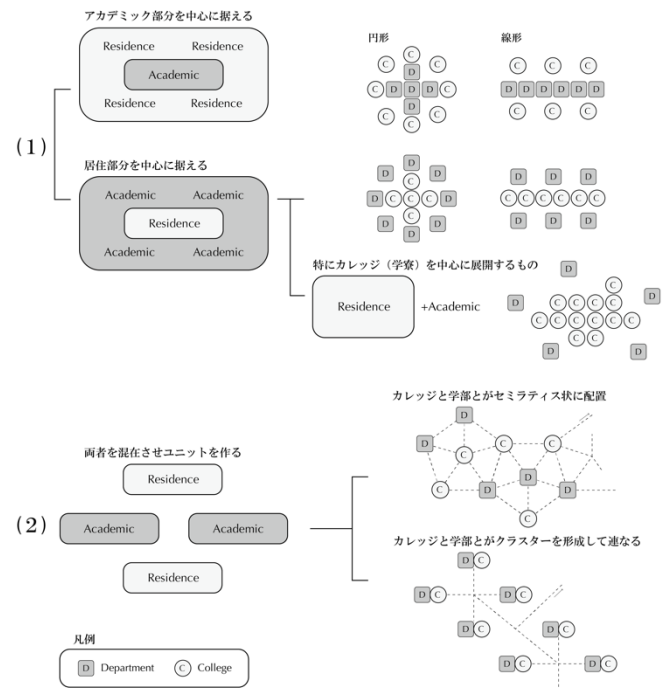


図5：アカデミックな部分と居住部分の配置パターン

## 2-4. 大学とまちの関わり

### 2-4-1. 大学と立地自治体とがともにつくってきた例

海外には大学と立地自治体とがともにまちを作っている事例が見られる。具体的には、イエール大学とニューヘイブレン市、ポートランド州立大学とポートランド市、ブリティッシュコロンビア大学とバンクーバー市がそれぞれにあたる。

バンクーバー市では、市の都市計画戦略とブリティッシュコロンビア大学のキャンパスマスタープランが連動している。キャンパスマスタープランに含まれる「UBC土地利用計画」によって、大学はアカデミックな施設だけでなく、キャンパス内の近隣住区で民間企業が実施する住宅開発や商業施設開発に対して大きなチェックバック権限をバンクーバー市から付託されている。

### 2-4-2. 大学とまちとの双方が空間を共有・運営する例

日本において、産官学連携のプログラムやソフト面でまちと連携が行われているが、建築や空間をまちとともに作ることや使うことは稀である。ポーロニャでは市立図書館の計画や資金面での援助を大学が行うことで、大学は公共空間の中に学生の居場所と大学窓口を獲得した。双方が空間を共有・運営しており、大学とまちの関係に対して新たな可能性を示唆している。

## 2-5. 日本の大学

### 2-5-1. 大学の立地と動向

日本の大学において、大学の拡大/縮小、新設/撤退という現象が各地で起きている。東京の大学の立地地域の変遷に関しては「工場等制限法」の制定が大きく関係している。これは1959年に制定され、23区を含む制限区域で大学増設を制限するものであった。それに伴い、大学キャンパスが郊外へと相次いで移転または新設され

た。国公立大学では筑波大学や首都大学東京、私立では中央大学を始めとする郊外キャンパスや学園都市・大学街の新設はこの頃に起こったものである。2002年になると工場等制限法が撤廃され、それ以降、都心回帰の現象が続いている。1980年代では郊外移転や新設とキャンパス規模の拡大が進行し、2000年代は郊外での学生数増加が抑えられ、特に私立大学の都心回帰が進行している。工場等制限法の制定と撤廃により、1980年代の郊外移転と2000年代の都心回帰という逆転現象が起きたことが確認できる。

### 2-5-2. 大学の公開性

日本の大学の形態は大規模団地型、街区型、ビル型、テナント型に大きく分類できる。東京大学や一橋大学、立教大学は団地型、神田・御茶ノ水周辺の明治大学や日本大学は街区型、工学院大学はビル型、デジタルハリウッド大学はテナント型に分類される。

大学の公開性はまず一つに大学の形態による。神田・御茶ノ水周辺や神楽坂周辺では学生が行き交い学生町の性質を持っており、敷地の一部がオープンスペースとして開放されている場合もある。塀で囲われた巨大な団地型の大学に比べると、空間や活動、または視覚的にも都市と何らかの関係性を持っているように思われる。

また、大学の公開性は大学の立地によるところもある。陣内秀信は彼の著書『東京の空間人類学』の中で、江戸の城下町特有の現象として、武士の「屋敷を構える意識」と町人の「店を構える意識(街路志向)」の二つの逆向きのベクトルが同じ都市内に存在することを説明した上で、大名屋敷の跡地に建てられた多くの住宅や大学に「屋敷を構える意識」が根強く残っていることを指摘している。実際に多くの大学は大名屋敷の跡地に建てられており、前田毛上屋敷の跡地には東京大学、松平家中屋敷の跡地には慶應義塾大学が立地し、それぞれ敷地を私的領域として塀で囲んでいる。つまり、江戸時代の土地利用が現代にも影響しているというのである。これを検証するために江戸の土地利用図に今の大学の位置をプロットした。その結果、大名屋敷の跡地に団地型の大学が立地し、大名屋敷の塀で外周を囲い外に対して閉じる意識が今の閉領域にも受け継がれており、また、旗本屋敷や組屋敷の跡地に街区型の大学が立地し、時代とともに塀が低くなり建物が立面を現したように、団地型の大学よりも外に開かれた空間が形成されていることがわかった。以前の土地利用や意識が大学の公開性にも関連していることが見出せる。

表3：江戸の土地利用と大学のタイプ

| 大学            | 大学のタイプ | 江戸の土地利用     |
|---------------|--------|-------------|
| 東京大学          | 団地型    | 大名屋敷        |
| 東京藝術大学        | 団地型    | 仏閣          |
| お茶の水女子大学      | 団地型    | 大名屋敷        |
| 筑波大学          | 団地型    | 大名屋敷        |
| 慶應義塾大学        | 団地型    | 大名屋敷        |
| 青山学院大学        | 団地型    | 大名屋敷        |
| 上智大学          | 団地型    | 大名屋敷        |
| 学習院大学         | 団地型    | 大名屋敷        |
| 日本女子大学        | 団地型    | 一般武家屋敷・大名屋敷 |
| 早稲田大学 戸山キャンパス | 団地型    | 農地・仏閣       |
| 明治大学 駿河台校舎    | 街区型    | 一般武家屋敷      |
| 法政大学          | 街区型    | 一般武家屋敷      |
| 日本大学 法学部      | 街区型    | 一般武家屋敷      |

### 3. 目指す大学像

#### 3-1. 再び「分散」へ

建築空間の歴史は「集中へ」という言葉に要約される。それには二つの意味が伴うようにも思われる。一つは「集約」であり、もう一つは「定位」である。「集約」は複合とも言い換えられるかもしれないが、様々なものが一箇所に集約化され、複合化され、完結した一つのものとして存在するようになった。それが効率的であり経済的でもあるからである。また、集約化という動きが加速する中で、人々は空間に「定位」するようになった。一つの場所に全ての機能が揃っているため、動く必要がなくなったからである。大学も例外ではなく、時間の流れの中で「集中へ」という歴史を辿ってきたことは先に述べた通りである。

完結した都市や建築で暮らす私たちは街を自由に駆け回ることが少なくなっている。移動は目的地への最短距離であり、行き先が発発するときにはすでに固定されている。出発点と到着点を連結しただけの線は、体験としては断片化されたものであり、点の継ぎとして感じられる。つまり、目的地の連鎖になってしまった移動には“途中”が無視されている状況があるのではないだろうか。しかし、面白いことは道筋や何かと何かが連続する間に起きるものである。自由に都市を「散歩」すること、自分だけのラインを描くこと、「分散へ」というベクトルを持つことを今の時代において考えられたいだろうか。効率性や経済性には変えられない体験を求めることや歩行が身体と空間とを結びつけることにもう一度価値を見出したい。

#### 3-2. 移動する共同体(コミュニティ)・都市と融解する大学

従って、今の時代、都市化された今の東京において、自発的に動き回る共同体によって形成される分散した大学を提案する。ユニヴェルシタスが都市を遊牧することで分散する建物をメッシュワーク的に繋いでいき、場や体験の連続として都市に織り込まれた大学を構想する。「ユニヴェルシタスの行動の軌跡=大学」となるような大学空間を目指す。つまり、大学の輪郭は常に揺れ動く曖昧なものであり、都市と大学とは相互に融解する。個々人の活動が大学と都市を区別しない空間的連続性の中で行われることを意図する。

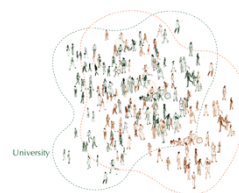


図6：輪郭が揺れ動く



図7：都市に溶融する

#### 3-3. 個の尊重・活動の集積から生まれる動的な大学

自分の周りに広がる空間[=界限]を中心に展開する大学をデザインする。それは静態的なものではなく、個の活動が集積し、伝播し、関係性の触手が伸びて重層的につながっていく動的な大学である。

#### 3-4. 生活の場としての大学・市民に開かれた大学

日本のキャンパスは互いに無関係な孤立した実験室や研究室の集積と化し、生活部分が生産的部分に追いやられてしまっている。歴史的に見ても、大学の建物としてまず発生したのは「学寮」であり、大学は教育関連施設だけでなく、住居施設やそれを支える付属施設を伴うトータルな「生活の場」となる必要がある。大学がトータ

ルな生活の場となることで、地域との繋がりが生まれ、本当の意味での「都市との一体化」が図られるはずである。

また、大学空間は本来、パブリックな性質を持っている。大学は学生の専用施設ではなく、一般市民が利用できる社会施設であり、大学の知的活動が市民にも開かれることが望まれる。

#### 4. 敷地

##### 4-1. 代官山エリアの概要と変遷

敷地を「代官山エリア」に設定する。当エリアは渋谷や恵比寿、中目黒のいずれからも坂を登らねばとどろき着かない高台にあり、周辺の交通拠点でもある繁華街とは異質な独自の雰囲気が漂う。それ故に代官山への入射角は多様であり、自らの立つ位置によって様々な見え方をすることが空間の特性とも言える。代官山を歩いてみると、低いスカイラインが維持された中低層の建物と後背地（繁華街の周辺）の高層建物とがコントラストをなし、ランドマークともなる高い建物によって方向性を掴むことができる。旧山手通り・八幡通り・駒沢通りとそれらの間を縫うように走る路地には、洒落た店舗が集積している。住宅、商業、オフィス、教育文化施設が混在し、代官山に住む人々や働く人々、そこを訪ねてくる人々が交じり合うヘテロジーニアスな環境が形成されている。

表 4：代官山の変遷

|        |   |
|--------|---|
| 江戸時代   | 近郊の農村の姿を呈する                                     |
| 明治維新後  | 西郷従道（隆盛の弟）の広大な屋敷が置かれたのを契機に財政界重鎮の邸宅地として開発が進む     |
| 関東大震災後 | 「同潤会代官山アパートメント」が建設される                           |
| 第二次大戦後 | 屋敷地の売却と分割が進み、エリア一帯が閑静な戸建住宅・社宅地となる               |
| 1960年代 | 「代官山ヒルサイドテラス」が建設される                             |
| 2000年代 | 同潤会代官山アパートメントが「代官山アドレス」に建て替えられ、エリアの商業地化・観光地化が進行 |

##### 4-2. ヒルサイドテラスと書き換えられた「都市性」

ヒルサイドテラスは代官山のイメージ形成に決定的な役割を果たした。ヒルサイドテラスが完成してから急速に代官山は変貌を遂げるが、ヒルサイドテラスが設定した都市の「規範」は街全体の景観形成に大きな影響を与え、共有化されている。

つまり、ヒルサイドテラスの持ち込んだ「都市性」がそのまま「代官山らしさ」になっている。それまで屋敷が並び、塀が連続する都市景観を呈していた代官山だが、同潤会アパート、そしてヒルサイドテラスができたことでパブリックスペースが外部に対して開かれ、オープンな性格を持つ街に姿を変えた。代官山はヒルサイドテラスによって、屋敷が並び外に対して閉じる意識から、外に対して開かれたオープンな性格を持つ街として「都市性」が書き換えられたと言えるのではないだろうか。また、そうした街が「開かれた大学」を実現する鍵を握っていると考える。

##### 4-3. 変化する代官山 -転換期-

代官山エリアは東京都心のやや西南に位置し、都市近傍ならではのダイナミックな変化を経験してきている。特に、代官山アドレス

の完成以降、住民人口は一挙に千人以上増加し、同時に、街を構成する店舗や来訪者の数と質に大きな変化が見られるようになっていく。八幡通り沿いではエリアの商業地化が急激に進行した。土地が次々と転売され、さらにそこに建てたビルをオーナーが第三者に転貸するということが行われるようになる。オーナーが住むことをやめ、責任を放棄した建物は地域とのつながりや地域への意識を失っていく。また、2005年から2006年には地価の高騰に伴い不動産取引が活発化し、社宅地の売買による新たな大規模マンション開発が空前のラッシュとなった。加速するマンション化によって新たに流入する新住民は”他者”のままであり、町内会など地域側の努力に”ただ乗り”している状況がある。こうしたスピードの速い「開発」は土着の人や店舗が街から離れてしまうととも、地域に繋がりのない新住民や新規店舗の増加を助長する原因ともなる。

現在でも猛烈なビル建て替えムーブメントが進行しつつあり、代官山は再開発の波の中にある。ヒルサイドテラスが作り上げた質の高い建築群を維持できるか、開発に押されて都市景観が損なわれていくかの転換点とも言える。都市景観の変貌とともに、商業や業務といった都市的空間と良好な生活環境の均衡が失われ、また、長年培われてきた地域社会が崩れることも懸念される。

##### 4-4. 伝統的な社会構造と人的ネットワーク

都市景観が大きく変化してきた反面、地域社会に目を転じてみると、古典的な社会構造の存在が浮かび上がる。代官山では町会や地区委員会、消防団体という旧来からの地域団体が行政と連携しながら街を支えている。エリアのアイデンティティを支えるのは、代官山に住み、代官山で働き、積極的に地域に関与する”人”である。代官山にはこうしたまちづくりに繋がる人的資源が複数存在する。

「商店会」や「えびすふれあい広場実行委員会」、「町内会」などの地縁型組織や、都市開発や都市の変化を契機に結成された「代官山ステキなまちづくり協議会」や「NPO 代官山ステキ総合研究所」などのテーマ型組織がそれにあたる。しかし、これらの活動は其中で留まり相互に関係を持っていないことが課題であった。

神楽坂や谷中など、代官山と同じく伝統的な社会構造が存在する街では地縁型組織を中心に行政の支援のもとで「まちづくり協議会」が発足しており、これが核となってまちづくりが行われている。各組織が連携し拡大していくための組織や個人が存在し、地縁型組織とテーマ型組織を結びつけている点で重層的なネットワークの形成に成功している。代官山にはこの「つなぎ」の存在が見られなかったが、近年、担い手同士の交流と協力が進展したのに合わせて、徐々に関連づけられるようになってきた。代官山ステキなまちづくり協議会が2006年に「渋谷区認定まちづくり協議会」に登録されたことで、行政である渋谷区と繋がったこともその要因と考えられる。徐々につながりかけている関係や活動をさらに高密度化・重層化していくことが必要になる。また、担い手の高齢化の問題もあり、次の世代にどう繋げていくか、新住民をいかにまちづくりに巻き込んでいけるかも重要な問題である。

#### 5. 設計提案

##### 5-1. 計画

###### 5-1-1. 分散する敷地

これからの社会や都市の問題として、人口減少や都市の縮退によ

って分散的に未利用地が発生する「スポンジ化」が起こることが予想される。また、敷地とする代官山エリアでは八幡通り沿いの商業施設が相次いで大規模なマンションに建て替えられる現象が起きており、住・商・業のバランスが崩れることとともに、それは住民が利用できる公共空間の減少を意味する。

こうした将来への仮説と現状の問題を踏まえ、すでに分散的に発生している未利用地や大規模開発の予定がある敷地を大学が漸次的に獲得していき、学生と市民のための開かれた学びの場とパブリックを拡張していくことを構想する。大学の計画と変換期にある代官山の再生計画を共に考える。



図 8 : 分散的に発生する未利用地を獲得する

### 5-1-2. 大学の規模

大学は6学部編成とし、学生数は地域住民や生涯学習も含めた12,000人ほどを想定する。

### 5-1-3. 大学の機能配置

大学の機能を大きく4つの枠[本部・学部・カレッジ・クラス]に分け、本部によって中心、学部によって地区(カルチェ)を形成する。[2-3-3]を参考に、カレッジと学部をセミラティス上に配置するパターンを取ることにする。アカデミック部分と居住部分を混在させることで、将来の動向に合わせて施設を増減可能にする。

本部には大学の事務や中央図書館が入り、学部には専門図書館や実験室・スタジオ等が入る。カレッジには個室と教室、食堂が設けられ、クラスは普通教室や研究室が入る。つまり、使い方や機能が固定するものを本部と学部で収容し、それ以外の汎用性のある使い方ができるものをカレッジとクラスに編成する。そうすることでユニヴェルシタスが移動することに加え、寮や教室、研究室などの「空間と機能」も学期ごとに引っ越しを行う。

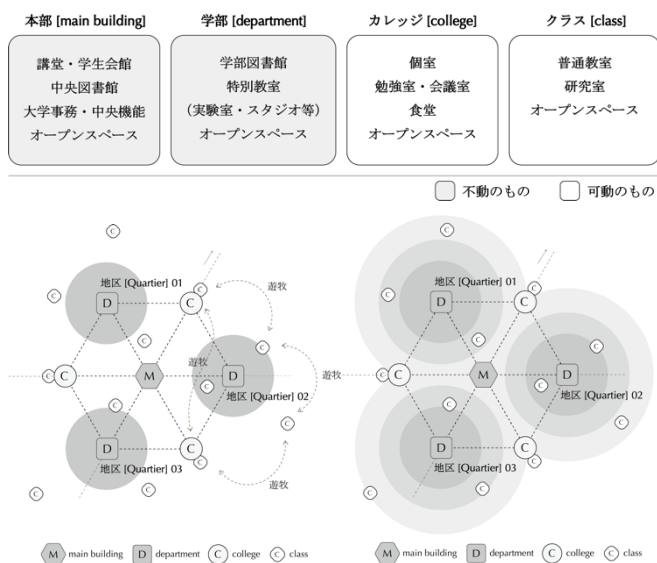


図 9 : 大学の機能と配置

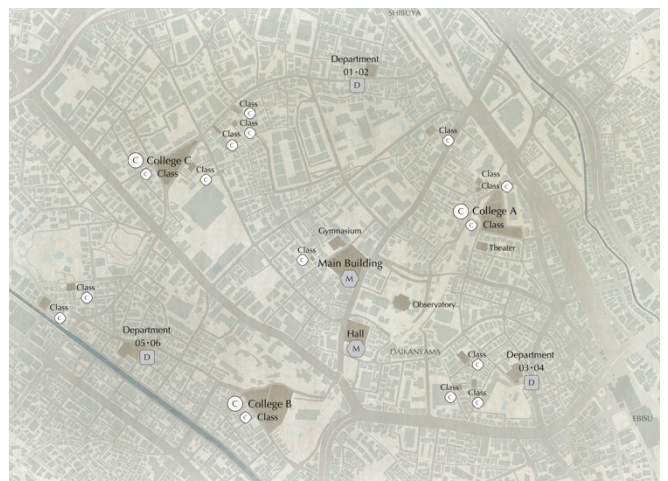


図 10 : 分散する敷地と機能配置

### 5-1-4. 大学とまちの関わり

大学が地域コミュニティの「つなぎ」となり、積極的にまちと関わっていくことを考える。代官山エリアには伝統的な社会構造が存在し活動を展開する一方で、それぞれの組織が関係を持っていないことが問題であった。地縁型組織とテーマ型組織をつなぐ存在として大学を位置付け、重層的に結ばれるネットワークを形成する。学生は地元の店舗や学校、企業と連携し、研究をしたり、インターンをしたりすることで、社会との接続を持ちながら街を学びのフィールドとする。また、代官山ステキなまちづくり協議会や代官山を研究している他大学と連携し、代官山のまちづくりに積極的に参加することで、大学と自治体がともにまちをつくることを実践する。前述したように、海外の大学では近隣住区での開発に対して大きな権限を付託されている例もある。本提案でもキャンパスマスタープランの上位計画に「土地利用計画」を据えることで、代官山のまちづくりに参画し、土地利用や様々な計画・開発に対してチェックバックする権限を持たせることを構想する。

地域コミュニティや活動自治体が抱えるもう一つの問題は、中心的な担い手の高齢化である。そうした状況に対しても、大学がまちづくりに関わることは有効である。学生の若くて新鮮な考えを取り入れることができ、また、学びたい学生がいる限り大学は永続的に存在するからである。新しい代に引き継いでいくことも可能であり、大学は継続的にまちと関わっていくことのできる人的資源と言える。

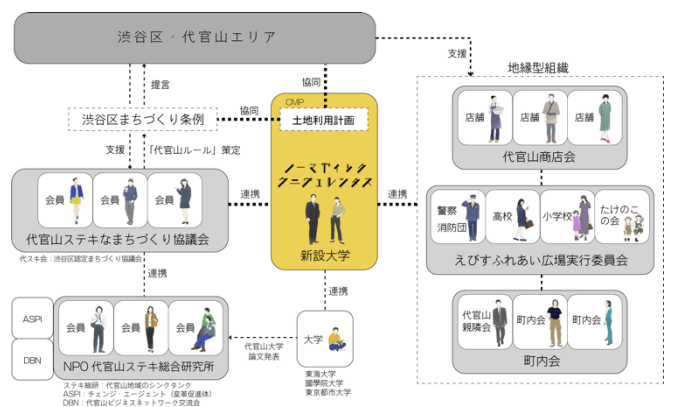


図 11 : 地域コミュニティの「つなぎ」

## 5-2. 設計

### 5-2-1. 大学の形態・ヴォイドとしての中庭

クォードラングやコート、スクエアと呼び方は様々であるが、中世の修道院を原型とする中庭空間は大学の心臓部と言える。また、中庭空間をはじめとするオープンスペースは特定の機能で固定されない永続的な空間＝ヴォイドであり、様々なアクティビティを生む場でもある。

この中庭形式の建築を参照しながら、現代のものとして読み替えることで新たな建ち方を提示する。中庭空間の持つ意味と重要性を認めつつも、他を寄せ付けず使われない場となってしまう形式的な建築も多い。求心性を持ちながらも排他性を取り除くための手法を思考し、「クォードラング」を開かれるパブリックとして昇華する。

#### (1) 地面の連続

「クォードラング」は西洋の壁勝ちの建築であり、その意味で一度、街と途切れている。都市と境目がなく連続していく建築を構想する上で、道と大学の敷地とが分断されず、「地面が連続すること」が一つのキーワードになり得る。都市の中を歩いていたらいつの間にか大学に足を踏み入れているような状況が作れないだろうか。地面が連続することは「体験が連続」していくことにも繋がり、都市を大学として、また、大学を都市として感じられるようになる。学生や代官山に住んでいる人、代官山を訪れた人のいずれもが利用できるパブリックな性質を持つ場をデザインする。

#### (2) 場の連続体

場の連続を生み出す一つの要素は、クォードラングが備えている性質である「中庭の増殖と連鎖」である。複数の中庭が連なって関係性が生まれるように建築を配置し、オープンスペースのネットワークをつくる。

さらに、もう一つの要素として「床の積層」を挙げる。クォードラングはそれ自体が一つの単位空間ではあるが、人が使うには非常に大きいスケールである。クォードラングをさらに次の単位へと分割していく。その方法として、「それぞれ機能を持った床＝場」の積層によって形づくられる建築を考える。議論の場や教室、個室とそれぞれ機能が乗った床をより小さな単位として挿入することで、空間が分節されるとともに、場が連続する状況が形として現れる。また、教室や個室が乗っていない部分を動線とし、そうした余白部分で中世の大学に見られるような「発生的な場」が生まれることを期待する。ユニヴェルシタスの移動がセレンディピティを増し、建物内の小さな回遊の経験が都市を歩くという大きな回遊の経験と重なることを意図しながら設計を行う。

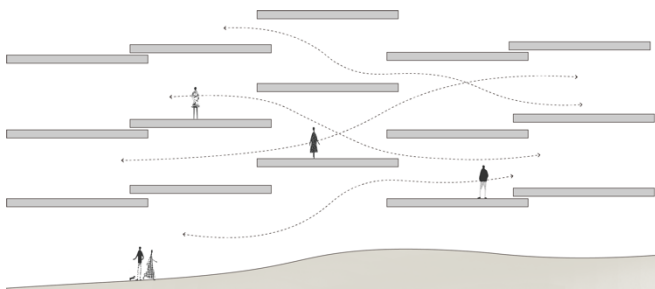


図 12: 空間の相互貫入・活動がつながる



図 13: 図面・模型写真・パース

### 5-2-2. 大学の全体性・集合体の形成

クォードラングを上記の手法によって開かれたパブリックとして読み替える。この読み替えたクォードラングは各敷地に置かれることで少しずつ変形し展開していく。読み替えたクォードラングが共通因子となり、分散する敷地に広がることで、場と体験の連鎖によって出来上がる「集合体」となる。

#### 参考文献

- 1) 岩城和哉：『知の空間』丸善株式会社，1998年
- 2) 横尾壮英：『中世大学都市への旅』朝日新聞出版，1992年
- 3) 岩城和哉：『ケンブリッジ大学カレッジ空間の形態分析』日本建築学会計画系論文集 第73巻 第630号,1825-1832, 2008年8月
- 4) 山崎新太：『ポローニャにおける分散した敷地と公共外部空間が形成する大学街の特性』日本建築学会計画系論文集 第74巻 第645号,2415-2423, 2009年11月
- 5) 渡辺泰男：『古都ウルピノとジャンカルロ・デ・カルロ』『SD 229』鹿島研究所出版会，1983年
- 6) 由里知久：『〈ユルバニスム〉の呪縛を超えて』『SD 165』鹿島研究所出版会，1978年
- 7) R.M. ルメール：『ルーヴァン・ラ・ヌーヴの基本構想』『SD 165』鹿島研究所出版会，1978年
- 8) 角田将吾・斎尾直子：『首都圏における私立大学キャンパスの都心回帰による過密化の実態』日本建築学会大会学術講演梗概集,2018年9月
- 9) 梅岡恒治：『大学キャンパスが周辺地域に及ぼす影響 -東京を事例として-』新領域創成科学研究科 環境学研究系 社会文化環境学専攻 学位論文，2008年3月
- 10) 陣内秀信：『東京の空間人類学』株式会社 筑摩書房，1985年4月25日
- 11) 前田礼：『ヒルサイドテラス物語 朝倉家と代官山のまちづくり』現代企画室，2002年12月25日